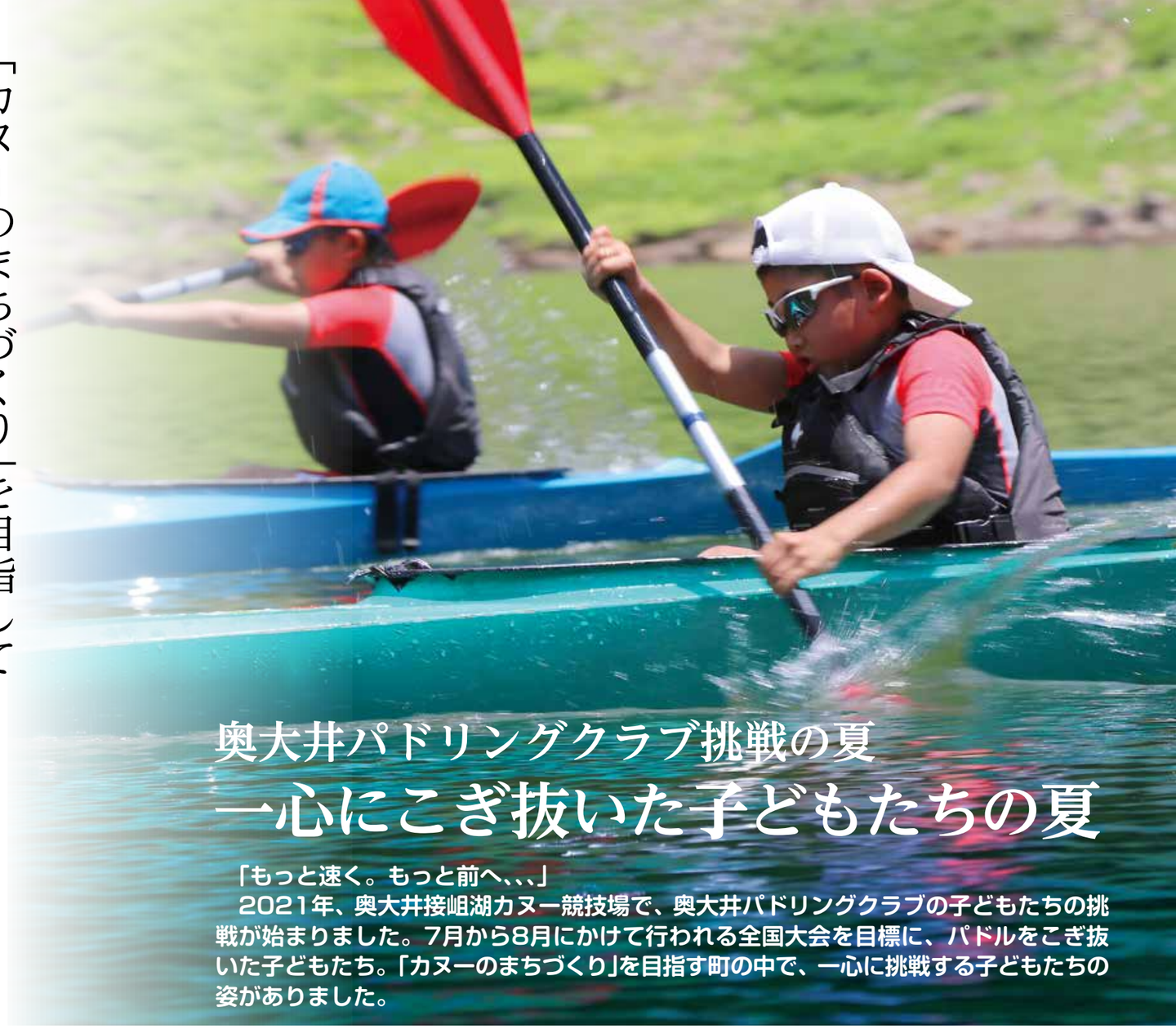

「カヌーのまちづくり」を目指して

奥大井パドリングクラブ挑戦の夏
一心にこぎ抜いた子どもたちの夏

「もっと速く。もっと前へ、、、」
2021年、奥大井接岨湖カヌー競技場で、奥大井パドリングクラブの子どもたちの挑戦が始まりました。7月から8月にかけて行われる全国大会を目標に、パドルをこぎ抜いた子どもたち。「カヌーのまちづくり」を目指す町の中で、一心に挑戦する子どもたちの姿がありました。

町は、平成15年に開催された「国民体育大会カヌー競技(以下静岡国体)」を契機に、「カヌーの町づくり」を進めてきました。カヌーの普及活動を進める一環で、子どもから大人までカヌーの魅力に親しんでもらおうと「奥大井パドリングクラブ」が発足されました。毎月、奥大井接岨湖カヌー競技場を中心に、カヌー体験が行われています。

今年4月、静岡国体の誘致活動に精力的に携わった大村敏正さんを会長に迎え、新たに「奥大井パドリングクラブ・アスリート部門」が始動しました。主に小中学生を対象に、カヌーの基礎能力の向上や応用的な技術力を養うことが目的。本川根小学校から3名、中央小学校から1名、そして本川根中学校から2名の児童生徒が練習に参加しています。

「水をしっかりをキャッチして!」

7月上旬、子どもたちに併走しながら、大村さんの熱を帯びた声援が接岨湖に響きました。全国大会を目指して、一生懸命練習に励む子どもたち。決勝進出や自己ベストタイムの更新など、各々の目標に向かって、子どもたちの挑戦が始まりました。

カヌーのまちづくりの原点は、平成15年に旧本川根町で開催された静岡国体までさかのぼります。当時、カヌー競技に馴染みが少なかった地域住民の認知度向上のため、本川根B&G海洋センターが中心となり普及活動が進められました。

また、小中学生の保護者の住民有志が集まり、「静岡国体に地元選手を出場させたい」「本川根を全国に知らしめたい」と一念発起。『本川根カヌーレーシングチーム』を立ち上げました。静岡国体必勝に向け練習を重ねた結果、地元選手の出場が叶い、47都道府県中、総合6位に入賞するなど大成功を収めました。

広報ほんかわね246号(平成15年9月発行)

「カヌーを町に根付かせたい」という当時の関係者の想いが今日まで引き継がれ、現在、様々な方法でカヌーの普及活動が行われています。

小中学校を対象としたカヌー教室や、県カヌー協会と共催した体験事業。また、一般社団法人エコティかわねの体験プログラムを年間を通して実施し、町内外に情報を広く発信しています。

しかし、町は少子化が進み、町内のカヌーの競技人口は減少しています。子どもたちが、カヌー競技に継続して打ち込んでいくための体制、環境作りが課題となっています。奥大井パドリングクラブが普及活動の先頭に立ち、川根高校カヌー部や町外の大学などと連携を図りながら、町が一体となってカヌーを盛り上げていくことが、必要になります。

静岡国体の誘致活動からカヌーの普及活動を始め、パドリングクラブの会長を務めている大村敏正さん(田代区)に、話を聞きました。

「川根本町全体でカヌーを盛り上げて行きたい。たくさんの子どもたちに参加してほしいね」そんな言葉から、カヌーを通した町づくりや、次代を担う子どもたちに対する想いが伝わってきました。

奥大井パドリングクラブでは小学生から大人まで楽しみながらカヌーなどを体験できます

interview

奥大井パドリングクラブ会長
大村 敏正 さん

目標は全国制覇。そして、、、カヌー全国大会を誘致すること

「静岡国体に出場する選手を育てたい」と思い、活動を始めたことをきっかけにカヌーの普及活動に力を入れてきました。平成15年以降、カヌーに対する地域の人たちの理解は進んでいると感じていますが、まだ足りません。奥大井パドリングクラブの活動を通して、さらなる認知度向上を図りたいと考えています。

今年発足したアスリート部門は、日本を代表する選手を育てることを目標に取り組んでいます。住民の皆さんが選手を応援し、育てていく環境作りを進めれば、地域全体がカヌーで活性化していくのではと感じています。

選手となる子どもたちには、練習時から「継続すること」「自主性」「目標を持つこと」を培ってほしいと思っています。競技人口が少なくなる中でも、一緒に努力し、喜びを分かち合って取り組んでいける人たちの参加を心待ちにしています。